やめとけ、でも俺は継ぐ

荒尾支部　　久間　匡晃

「匡、今日も手伝いよかね？」

この言葉を合図に、幼い頃から手伝いをするのが日課でした。

私の家は祖父の代から続く梨農家で、長洲町で新高を６０ａ、あきづきを３０ａ他８品種、合計１．３ｈａ作付けしています。現在、父・母・私の３人で梨の生産を行っています。

幼い頃、頑固で厳しかった父に言われると、断る事が出来ず、休みの日に友達と遊びに行くことや、ゆっくりゲームをしたい気持ちを抑えて、手伝いをするのが苦痛でした。そのため、農家になりたい気持ちや、梨に対する興味は少しもありませんでした。

高校を選ぶ時もその気持ちに変わりはなく、農業とは全く関係のない普通高校への、進学を決めました。高校では、特に打ち込む部活も無く、淡々と卒業を迎えました。卒業後は、大分の工場に就職し、２年間を過ごしましたが、賃金面、人間関係に不満を持ち、退職をしました。特にやりたい事も無かったため、とりあえず職業訓練所で機械関係の勉強をして、玉東町で就職しましたが、最初の会社と同じような不満が生まれ、退職しました。その後はやりたい事が無いため、家の手伝いをなんとなくしながら、次は何をしようか、「いずれは長男として、家を継ぐことになるのかな。」と思いながらもだらだらと過ごしていました。そんなときに地元の青壮年部の先輩から「そんな家でだらけとらんと、家の仕事ば真剣にやってみらんか。」と厳しい声を頂きました。その先輩が梨農家という事もあり、その言葉が響き、父に「俺、親父の後を継ぎたい。」とお願いをしました。父に「やめとけ」と一言いわれ取り合ってもらえませんでした。その後分かりましたが、父は農業が厳しいので、自分の代で梨農家をやめるつもりでした。それでも何度もお願いを続けると、「分かった。やってみろ。」と、頑固者の父は折れてくれました。

農業を始めるといったものの、時間があるときに父の言う事をそのままやって手伝っていただけなので、素人同然だった私は、父の言う事を忠実にやる事で精一杯でした。

そのような中で、農業を初めてから自分の中で、農業に対する向き合い方が変わった出来事が３つあります。

１つ目は、あきづきの剪定で父に意見した事です。

農業を始めると同時期に梨の青年部に加入をしており、剪定講習会に、積極的に参加をしていました。他の生産者の剪定方法を見ていると、私の家とは違う点も多く見つかり、父に「今日見に行ったとこは、こがんやり方ばしよらしたよ。」というと、「うちはうち、よそはよそ。」と突っぱねられてしまいましたが、剪定講習会に通い始めて３年目に、長果枝剪定という技術に出会いました。従来の剪定方法に比べ花芽がきれいにつき、果形も良くなるといった話を聞き、これは取り入れたいと思いました。そこで、父に講習会で勉強したことを話し、試験的にやらせてもらえることになりました。講習会の時に聞いていた通り、従来の剪定方法より花芽、果形が良くなりいい物を作る事が出来ました。父も結果を見て、この方法であきづきの管理をすることで納得してくれました。父に少し認められた気がして、農業に対する真剣さが増した出来事でした。

２つ目は晩霜被害にあったことです。

花付けをして２日後の事でした。寒くて朝２時に目が覚めました。温度計を見ると０度を下回っていた為、父を叩き起こしました。急いでスプリンクラーを回しましたが、凍っていて回らずお湯で一つ一つ溶かしながら対応しました。全てを溶かし終わったのが朝６時で、すでに手遅れでした。この晩霜による被害は新高８割、あきづき３割と主要品種が被害に遭い、大変な思いをしました。それを踏まえて次の年は、梨部会で地区ごとに、３か所温度計を設置し、５度以下になるとメールが来るようになり、早い段階でスプリンクラーを回し、晩霜による被害を最小限に防ぐ対策を行っています。農業の自己責任の重さを、体感する出来事になりました。

３つ目は、父が入院をしたことです。

今年の１月剪定をしているときに父の手が思うように動かず、様子がおかしいのに気づきました。それでも仕事をしようとする姿を見て、母が強引に病院に連れて行きました。複数の病院を回り精密検査をすると、血管が小さくなっていて入院の必要があるとの事で、そのまま父は入院をしました。突然父が入院する事となり、作業の予定も変更する事となりました。父は毎日４回ほど電話をかけてきて仕事の話しはあまりしないものの気にかけてくれています。しかし、父が入院して一番困っていることは人手不足です。今まで３人で行っていた作業を２人でしなければならず、作業が遅れて困っていると、その話を聞きつけた青壮年部の盟友たちが剪定、花付けなどの作業を手伝いに来てくれたので、遅れていた作業も追いつく事が出来ました。この時、青壮年部をはじめと

する繋がりの大切さに気づきました。

私が青壮年部と出会ったのは、私が就農して２年目、長洲町には梨農家が少なく意見交換などもできず、横のつながりも少ないのをみて先輩盟友の方が、青壮年部を紹介してくれました。飲み会から参加をしてみると、そこには荒尾の梨の生産者や、園芸作物を作っている生産者、様々な作物を作る生産者の方がいて話せば話すほど、刺激ある有意義な時間を過ごさせてもらい、すぐに加入をきめました。そこで出来た横のつながりで、梨についての意見交換、他作物の技術を梨の生産に応用する方法など、知識もつき非常に意味のある時間を過ごす事が出来ています。

現在は経営者となり、父が一人で黙々やってきたことの偉大さに気づきました。まずは従業員を雇い、その後は仕事の効率化のために、スマート農業の導入、収量が上がり作業性も良くなる、ジョイントＶ字栽培の導入を行い栽培面積の拡大、品種も作業性を考えながら増やしていきます。将来的には、法人化を視野に入れながら長洲一の梨農家を目指していきます。